

## 社会科標準問題

平成26年度

## 注意

1. 問題は1から5までであるが、そのうち4題を解答すること。どの4題を解答するかは、学校の指示に従うこと。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に指示通り記入すること。
3. 所要時間は50分とする。
4. 解答用紙の選択した(または指定された)問題番号の□に○を記入すること。

大阪府高等学校社会（地歴・公民）科研究会

1 次の文章を読み、下の問いに答えよ。

「あの世」はあるのだろうか。これは、古来より人類にとって大きな疑問である。物質を超えた意識または霊魂だけの世界の存在や霊魂の不滅を信じる人もいれば、意識も脳という物質から生じた現象であり、脳から独立した意識や死後の世界などは存在しないと信じる人もいる。ここでは、先哲たちが死後の世界や意識、魂についてどう捉えてきたのかを概観し、人生の根幹に関わるこの問題について考えるヒントを探ってみよう。

(a) ギリシャ神話やオルフェウス教の影響を受けた(b) ピタゴラスは、宗教教団を組織し、霊魂の不滅と輪廻（生まれ変わり）を唱え、魂の浄化を目的として弟子たちとともに禁欲的な生活を送ったと伝えられる。そのピタゴラス学派の思想に触れたプラトンの著作『パイドン』によれば、ソクラテスは、不当な裁判による死刑に際し、嘆き悲しむ弟子たちとの対話を通じて(c) 肉体が滅びても魂は永遠に不滅であると語り、生涯に渡って「よく生きる」ことを貫き通し、平然と毒杯をあおいでこの世を去った。また、(d) プラトンのイデア論を中心とし、神秘的要素などを加えた新プラトン主義においては、世界は超越的な一者（ト・ヘン）である神から流出してまた神へ返ると説く。さらに(e) キリスト教やその母胎であるユダヤ教、そしてそれら二宗教の信徒を啓典の民とよぶイスラーム教においては、「あの世」を肯定していることは言うまでもない。たとえばイスラーム教において、「来世」を信じることは(f) 六信・五行の一つである。ちなみにギリシャ思想とキリスト教は、西洋思想の二大潮流と言われ、通常、前者は理性中心、後者は信仰中心の別個の流れとして捉えられる傾向にある。しかし、(g) キリスト教の信仰に、教義として論証的な基礎を与えた教父アウグスティヌスの神学はプラトンや新プラトン主義の思想に、スコラ哲学はアリストテレスの哲学に多くの影響を受けていることから、両者は深く密接な結びつきをもっているものと理解できる。

では次に、「あの世」の存在を否定する思想についてみてみよう。デモクリトスは、万物の根源をそれ以上分割することのできない微小な物質的存在である「原子（アトム）」に求めた。無数の原子（アトム）が集合、離散することにより万物の生成消滅が生じ、魂もその万物に含まれると考えている。(h) エピクロスはこの原子論を継承し、霊魂は肉体の解体にとともなって消失するので、死を恐れる必要はない、死の苦痛は迷信に由来するものだと説いた。

さて、現実主義的な思想を展開した(i) アリストテレスは、この問題についてどう考えていたのだろうか。アリストテレスの心理学説（霊魂論）では、人間の理性は受動的理性と能動的理性（非受動的理性）の両面を有し、受動的理性は肉体の死滅とともに機能を停止するが、能動的理性は永遠で神的であり、発生したものでなく不死であり、純粹で動かされることのない現実態だとしている。プラトンのイデア論を批判したアリストテレスは、意外にも霊魂の不滅を肯定する側に立つと考えることができる。

では、科学技術が高度に発達した現代においては、どう考えられているのであろうか。脳科学や先端医療技術が発達し、臨死体験の事例も多数報告され研究されているが、死後の世界についての万人が納得する確証は、いまだ得られていないといえよう。

先哲の時代から現代に至るまで「あの世」についての見解は分かれている。死後、魂がどうなるのかは不明である。すなわち私たちは死後どうなるのか、ある程度わかっているつもりになっているが、実は本当のことは知らない。この無知の知、つまり不知の自覚から再度出発し、一つ概念に固執せず、あらゆる可能性を吟味し続けることが「よく生きる」ことに結びつくのではないだろうか。

問1 下線部(a)に関して、ギリシャ神話に登場する神についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 神は無から天地を作った創造神で、自ら選んだ民に律法を与える。そして律法を守る者には救済を与え、破れば厳しい罰を与える裁きの神であり、正義の神である。
- ② 神々は人間と同じように喜怒哀楽の感情をもち、盗みや不倫なども天衣無縫に行う。そしてたびたび人間の世界にかかわり、人生や歴史を動かすこともある。
- ③ 神々には善神と悪神がいて2つの勢力に分かれて戦い、最終的には善の勢力が勝利して最後の審判が行われ、世界は理想的で完璧なものとなる。
- ④ 神は天地を創造したが、その後は人間世界に介入することをやめる。そして自然に内在する合理的な法にもとづいてのみ宇宙は統治される。

問2 下線部(b)に関して、ピタゴラスは神話的世界観をしりぞけ、ロゴスにもとづいて万物の根源を追究した自然哲学者の一人であるが、その他の自然哲学者の記述として誤っているものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① ヘラクレイトスは、「万物は流転する」と考え、その根源は「永遠に生きる火」としてとした。
- ② パルメニデスは、「在るものは在り、在らぬものは在らぬ」と主張し、運動や変化を否定し、存在は不動であり一であるとした。
- ③ エンペドクレスは、万物の構成要素として火・空気・水・土の4元素をあげ、それらは愛によって結合して万物が生成し、憎しみによって分離し消滅するとした。
- ④ アナクサゴラスは、「人間は万物の尺度である」と主張し、個々の人間の判断があらゆるものの善悪と真理を定める基準であるとした。

問3 下線部(c)についてのソクラテスの発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 空の鳥を見よ。まかず、刈らず、倉にしまわないが、しかも天にいますあなた方の父が養いたもう。あなた方は彼らよりはるかにまさるではないか。心配によってあなた方のだれが寿命をちょっとでも延ばせるか。
- ② 意欲がわたしにあっても、善の実践がとまいません。欲する善はせず、欲しない悪をこそしています。しかし、欲しないことをするのはわたしでなくて、わがうちに住む罪がそれをするので。… わたしは何と惨めな人間でしょう。
- ③ ぼくがこれから行くのは、この世の神々とは別の、賢明で善良な神々のもとへであり、さらにまた、この世の人々よりもすぐれた、すでに亡き人々のもとへであると考えている。
- ④ ローマとアテナイとで、また現在と未来とで、それぞれ違った法があることにはならない。いやむしろ、どんな国家でも、またいかなる時代においても、永遠にして不変なる一つの法が包みこんでいることであろう。

問4 下線部(d)に関して、プラトンの思想についての説明として正しいものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 師ソクラテスの精神を受け継ぎ発展させたプラトンは、たえず変化する感覚的経験の世界を超えて、神の啓示によってのみとらえられる永遠に変わることのない普遍的なイデアの世界が存在すると考えた。
- ② イデアこそ完全で理想的な真の实在であり、現実の個々の事物はその不完全な模造で単なる影ではあるが、現象界においてしか達成することのできない人間の使命があると考え、イデアよりも現実を重視するよう主張した。
- ③ 人間の魂は、かつてはイデアの世界に住んでおり、この世にうまれるとともに肉体という牢獄の中に閉じ込められイデアの記憶があいまいになったが、イデアの想起、すなわちフィリアによってイデアの世界を学び知ることができると考えた。
- ④ イデアを認識する知恵にすぐれた理性的な哲学者が統治者となり、その指導のもとに防衛者が勇気の徳、生産者が節制の徳を発揮するとき、国家全体に正義が実現された理想国家になると考え、民主制には批判的な立場をとった。

問5 下線部(e)に関連して、イエスが当時のユダヤ教をなぜ批判し、何を重要視したのかについての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① イエスは、律法を守りさえすれば救われるとする律法主義を批判し、最も重要なことは外面的・形式的に律法を守るのではなく、罪を悔い改め、神を愛し、隣人を自分のように愛することであると説いた。
- ② イエスは、ユダヤ教徒が偶像崇拜を行っていることを批判し、最も重要なことは外面的・形式的に礼拝を行うのではなく、理性によって気概と欲望を統御し、魂全体の秩序と調和を保つことであると説いた。
- ③ イエスは、イスラエルの民のうちパリサイ派が選ばれて救われるとする選民思想を批判し、最も重要なことは外面的・形式的に宗派を守るのではなく、蔑視され、差別されて苦しむ貧しく弱い人々をこそ愛し、励まし、勇気づけることだと説いた。
- ④ イエスは、律法を守らなければ地獄に落ちると思い込ませる律法主義を批判し、最も重要なことは外面的・形式的に律法を守るのではなく、恩寵による十字架の贖罪を信じ、信仰と希望と愛に燃えることだと説いた。

問6 下線部(f)に関して、次のア～ウは六信・五行のうちの3つについて説明したものである。その正誤の組合せとして正しいものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

- ア 啓典（聖典）：六信の一つで、神が預言者を介して人類に下した数多くある啓示の書。中でも『(旧約) 聖書』のモーセ五書と詩篇、『新約聖書』の福音書、そして特に『クルアーン（コーラン）』が重要とされる。
- イ 預言者：六信の一つで、未来を予言し、終末を警告する者。ムハンマドは、ヒラー山の洞窟で瞑想しているときに神の啓示を受けた、唯一にして最大の預言者である。
- ウ 信仰告白：五行の一つで「アッラーのほかには神はなし」「ムハンマドはその使徒なり」という二つの最も根本的な信条をアラビア語で宣言すること。1日5回の礼拝のたびに唱えるほか、異教徒がイスラームに改宗する際などにも唱える。

- ① ア 正 イ 誤 ウ 誤      ② ア 正 イ 正 ウ 誤  
 ③ ア 正 イ 誤 ウ 正      ④ ア 誤 イ 正 ウ 正  
 ⑤ ア 誤 イ 誤 ウ 正      ⑥ ア 誤 イ 正 ウ 誤

問7 下線部(g)に関連して、アウグスティヌスの著作として誤っているものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 『神学大全』  
 ② 『神の国』  
 ③ 『三位一体論』  
 ④ 『告白』

問8 下線部(h)に関連して、エピクロス思想についての次の記述の空欄（あ）（い）に入る語句の組合せとして正しいものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

エピクロス派の人々は快楽主義の立場をとったが、真の快楽は一時的・衝動的なものではなく、永続的・精神的なものであると説き、肉体や死の恐怖を離れた魂の平安すなわち（あ）を求めた。彼らは「い」を信条とし、心を乱す原因となる政治や社会の雑踏を避け、内面の静けさと安らぎを求めて質素に暮らす生活を理想とした。

- ① あ アパテイア      い 隠れて生きよ  
 ② あ アタラクシア      い 隠れて生きよ  
 ③ あ アパテイア      い 自然にしたがって生きよ  
 ④ あ アタラクシア      い 自然にしたがって生きよ

問9 下線部(i)に関連して、次の文章はアリストテレスが幸福について考察したものである。アリストテレスの思想を踏まえて、この文章の趣旨に合致するものとして最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

幸福は、閑暇（スコレー）に存すると考えられる。けだしわれわれは、閑暇を持たんがために忙殺されるのであり、平和ならんがために戦争を行う。いったい、実践的なものもろもろの卓越性（徳）の現実の活動は政事とか軍事とかの領域において行われるものだと考えられるが、……政治的とか軍事的な営みは、たとえうるわしさや規模の大きさにおいて優越してはいても、非閑暇的であり、或る目的を希求していてそれ自身のゆえに望ましくあるのではないのに対して、知性（ヌース）の活動は——まさに観照（観想）的なるがゆえに——その真剣さにおいてまさっており、……かく、自足的・閑暇的・人間に可能なかぎり無疲労的・その他およそ至福なる人に配されるあらゆる条件がこの活動に具備されているものなることが明らかなのであってみれば、当然の帰結として、人間の究極的な幸福とは、まさしくこの活動でなくてはならないであろう。  
 （『ニコマコス倫理学』より）

- ① 人間の究極的な幸福とは、政治的活動である。なぜなら、政治的営みはうるわしく、名誉が得られるものであり、ポリスの安定という最高善を目的として希求しているからである。
- ② 人間の究極的な幸福とは、軍事的活動である。なぜなら、軍事的営みは規模においてまさっており、非閑暇的で世界の平和という最高善を目的として希求しているからである。
- ③ 人間の究極的な幸福とは、知性的活動である。なぜならそれは、それ自身のゆえに望ましくゆとりを伴うもので、人間の卓越性（徳）にもとづく、真理を観想する状態であるからである。
- ④ 人間の究極的な幸福とは、閑暇的活動である。なぜなら人間の卓越性（徳）は、実践的な政事や軍事などの領域において発揮されるものであり、それによってポリスの人々に閑暇をもたらすからである。

問10 本文の内容に合致する記述として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 死後の世界があるかどうかの判断は、難しい。しかし、ピタゴラス学派やプラトンなど、死後の世界が現実の世界よりも悪い世界だと考えている思想家たちは、死後の世界の苦悩から逃れるために、永遠の生命を求めて弟子たちとともに厳しい禁欲生活を送り、魂の浄化による現実の世界での幸福を最高の目的とした。
- ② 死後の世界があるかどうかの判断は難しいが、ユダヤ教やキリスト教、イスラームなどの宗教においては、死後の世界があると信じられている。しかし、信仰中心のキリスト教とは独立した、理性中心のギリシャ思想においては、死後の裁きや輪廻については「よく生きる」ことの根拠にならないとして、否定されている。
- ③ 死後の世界があるかどうかの判断は、難しい。アリストテレスによれば、靈魂は肉体の死滅とともに消失するものとされており、現代の脳科学においても、意識は肉体と分離した状態では存在しえないと捉えるのが一般的なので、死後の世界を肯定せず、現実だけを重視して生きるべきである。
- ④ 死後の世界があるかどうかの判断は、難しい。死後の世界や靈魂の永続性については、先哲の時代からさまざまに考えられてきたし、現代においても万人の認める真実は見出されていないが、固定観念に縛られることなく、様々な立場や意見に柔軟に耳を傾けていくべきである。

2 次の文章を読み、下の問いに答えよ。

昨今の日本では、大きな事故や災害が続き、それによって日常生活の基盤そのものを奪われ、喪失感に苛まれている人々がいる。また一方で、格差社会が拡大する中、職業の選択や継続がうまく行かず、挫折感を抱える人々も多い。人生における喪失や挫折の経験は、ときとして人間に大きな心理的打撃を与えるが、そこから立ち直る際の拠り所のひとつとして、宗教や思想がある。特に、喪失や挫折の克服から生まれた宗教や思想は、立ち直るためのヒントに満ちている。

例えばそのひとつに、仏教がある。仏教の始祖は、釈迦族の王子、ゴータマ＝シッダールタであるが、彼は生まれてすぐに母を失っている。王子として何不自由ない生活を送りつつも、内省的な青年に成長し、人生のむなしさに煩悶するようになる。そして 29 歳の時にすべてを捨てて修行者となり、苦闘の末、35 歳の時に悟りを開いて(a) ブッダとなった。

ブッダによれば、この世界でいつまでも変わらないものはない。すべてのものは変わりゆく、消えゆくものである。(b) その真理を理解せず、何かを失うたびに嘆いていると、いつまでも苦しみが続く。 そのように執着する自分自身も実は、(c) 他と独立に実体として存在しているわけではなく、他とのつながりの中でかりそめに存在しているにすぎない。 そのほかなさの中で、(d) 今あるすべてをいとおしみ、日々を怠らずに生きるなら、たとえすべてを喪失しても苦しむことはない。 このことを悟ったブッダはあらゆる執着や煩惱から解き放たれ、80 歳まで生きて、安らかに亡くなった。

ブッダの教えから、人生において喪失は逃れられないことであり、喪失したものを取り戻そうとするのではなく、喪失を受け入れていく覚悟が必要なことが分かる。私たちは過酷な現実と直面するたびにその覚悟を試されることになるが、ブッダや、(e) ブッダに続く人々が説いたように、この世界のありようをどう見るか、その認識の仕方によって人生のあり方が変わってくるといえる。

「喪失」とともに「挫折」もまた、人間を苦しめるものであるが、挫折の克服については孔子の生き方が参考になる。孔子は 3 歳で父を亡くし、経済的困窮の中でさまざまな職業を経験したが、学問で身を立てることを決意し、祖国魯の役人となった。諸国が軍事闘争に明け暮れる時代状況の下、(f) 諸子百家と呼ばれる思想家たちが、理想的な政治のあり方を競いあつて説く中で、孔子は(g) 家族道徳を社会的関係の基礎に置き、(h) 仁と礼を身につけた君子による徳治政治の必要性を説いた。その手腕で司法長官にまでのぼりつめたが、政治改革の失敗によって失脚すると、14 年に及ぶ流浪生活を送ることになった。このような流波万丈な人生の中で、孔子が力を注いだのは弟子たちへの教育であった。その教えを受けた弟子たちの尽力によって、孔子は政治顧問として魯に呼び戻され、晩年を過ごした。

「あるべき姿」を追求する孔子の生き方は、(i) 「あるがままの姿」を肯定する生き方と異なり、挫折を経験しやすい側面があるかもしれない。実際、孔子は失脚と流浪という大きな挫折を経験した。しかし、学問に励み、自らの人格を磨く努力を怠らない生き方が他の人々を引き付け、その人間関係のネットワークに支えられて孔子は人生をまっとうすることができた。そこには挫折を克服するために必要な姿勢が表れているといえる。

私たちはブッダや孔子のように生きることはなかなかできないかもしれない。しかし、喪失や挫折を経験したとき、先人たちの生き方や考え方にヒントを得ながら、自らの人生を見つめ直すことは大切なことだといえよう。

問 1 下線部(a)について、「ブッダ」とは何を意味する言葉か。次の①～④より一つ選べ。

- ① 目覚めた者      ② 布教する者      ③ 瞑想する者      ④ 出家した者

問 2 下線部(b)について、ブッダはこのことを人々に具体的に理解させるため、多くの説法を行った。あるときは、愛児を失い気が動転している母親に対して、以下のような言葉を告げたが、その意図として最も適当なものを次の①～④より一つ選べ。

「町に行って家ごとに訪ね歩き、まだ一度も死人を出したことの無い家から、芥子粒をもらってきなさい。」

- ① 芥子粒を求めて家ごとに訪ね歩くという試練を自らに課すことで、愛児を失った悲しみから逃れられることを示した。  
② 死人の出していない家の芥子粒を手に入れられれば愛児を生き返らせることができ、悲しみから解放されることを示した。  
③ いくら訪ね歩いてもそのような芥子粒は手に入らないということから、人間は死を免れないことを示した。  
④ 幼くして亡くなった子どものために芥子粒を手に入れて供養することによって、苦しみをやわらげられることを示した。

問 3 下線部(c)について、このような考え方を縁起説というが、のちにこの考え方を深化、発展させ、空の思想として確立した人物を次の①～④より選べ。

- ① 竜樹      ② 達磨      ③ 無着      ④ 如浄

問 4 下線部(d)について、ブッダの説く「慈悲」に関する次の文章を読み、(あ)～(う)に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の①～④より選べ。

「慈悲」とは、他者に(あ)を与える「慈」と、他者の(い)を取り除く「悲」からなり、生きとし生けるものすべての幸福と平和を願う心のことである。のちの大乘仏教では、(う)の心としてこの慈悲が特に強調された。

- ① あ 楽      い 苦      う 自利  
② あ 愛      い 罪      う 利他  
③ あ 楽      い 苦      う 利他  
④ あ 愛      い 罪      う 自利

問 5 下線部(e)について、仏教の唯識学派の考え方を説明したものとして最も適当なものを次の①～④より一つ選べ。

- ① 自己の本質と宇宙の根本原理は一体であることを瞑想して体験することで、輪廻の苦悩から解脱することができるのである。  
② 世界があると素朴に信じる日常の態度から、純粋な意識の内面に立ち返り、そこから現れる現象をありのままに記述するべきである。  
③ 流動する生命の流れが根源的な実在であり、物質はその生命の流れが後に残した痕跡なのである。  
④ 世界のすべての事物は実在せず、もののあらわれは心によって生み出された表象にすぎないのである。

問6 下線部(f)について、諸子百家に関する次の説明のうち、最も適当なものを次の①～④より一つ選べ。

- ① 墨家の祖である墨子は、自他の区別なく人々が平等に愛し合う非暴力主義や、あらゆる戦争を否定する非攻を説き、防衛集団を組織して弱小国の防衛にあたった。
- ② 法家の大成者である韓非子は、人間を利己的かつ打算的な存在とみなし、法や刑罰などの強制力によって社会秩序を維持する法治主義の必要性を説いた。
- ③ 蘇秦や張儀に代表される陰陽家は、強大化する秦との外交的駆け引きとして、秦以外の六国が連合する連衡策や、秦とそれぞれが和議を結ぶ合縱策を説いた。
- ④ 孫子に代表される名家は、弁論や説得の術を指南し、言葉とそれが指し示す実体との関係を正確にしようとしたが、白馬非馬論のような詭弁に堕した。

問7 下線部(g)について、孔子の考え方を説明する次の文章を読み、(あ)～(う)に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の①～④より一つ選べ。

孔子は、「(あ)なるものは、それ仁の本たるか」と述べ、家族において自然に育まれる親愛の心を、社会の人間関係に押し広めていくことによって仁が完成するとした。そしてすべての人がまごころである(い)と思いやりである(う)を養って仁を実践すれば、平和な社会秩序が実現されると説いた。

- ① あ 孝悌      い 忠      う 恕
- ② あ 孝悌      い 恕      う 忠
- ③ あ 礼楽      い 忠      う 恕
- ④ あ 礼楽      い 恕      う 忠

問8 下線部(h)について、孔子の仁と礼の思想を受け継いだ孟子と荀子の考え方として最も適当なものを次の①～④より一つ選べ。

- ① 孔子の仁の思想を受け継いだ孟子は、性善説を唱え、人間は生得的に正しい心を持っているので、その心の働きをありのままに成長させることが重要であるとし、教育による作為的な人格形成を否定して、自由放任の大切さを主張した。
- ② 孔子の仁の思想を受け継いだ孟子は、性善説を唱え、人間の心には生まれながらに徳の芽生えがあり、それらを養い育てることによって、思いやりや正義感、礼儀作法や善悪の判断力などを備えた道徳的人格を完成させることができるとした。
- ③ 孔子の礼の思想を受け継いだ荀子は、性悪説を唱え、人間の本性は悪であり、人間の善は後天的な作為によって作られたものであるとして、欲に従う人民の行動を刑罰をともなう法律によって規制し、悪い本性を矯正する必要があると説いた。
- ④ 孔子の礼の思想を受け継いだ荀子は、性悪説を唱え、人民の本性が悪である以上、力によって民衆を支配する霸道政治を行うほかないが、霸道政治が行きすぎると、天の下す命が改まって新しい王朝が建つ易姓革命が起きると唱えた。

問9 下線部(i)について、「あるがまま」を重視する老子や荘子の考え方の説明として**適当でないもの**を次の①～④より一つ選べ。

- ① 老子によれば、儒教の説く仁義の道徳は作為的であり、本来の道は万物をありのままに生み育てる無為自然の道であるのに、その道が廃れたために生み出された偽善的なものである。
- ② 老子によれば、万物の根源は「道(タオ)」であり、天地に先立って生じ、万物を永遠に生み続けながらも、人間の感覚では捉えられず、言葉では表現できないものである。
- ③ 荘子によれば、親子・君臣・夫婦など人間の役割分担を重視する儒教道徳は本来のあり方からはずれており、そのような人為的な差別や対立を越えた絶対無差別の世界が本来の世界である。
- ④ 荘子によれば、世間的に価値があるかどうか、有用か無用かなどという人為的な分別にとらわれることなく、素朴で寡欲な人々が小さな国家の中で質素に暮らす小国寡民が最も理想的な国家のあり方である。

問10 本文で述べられている内容と合致する記述として最も適当なものを、次の①～④より一つ選べ。

- ① ブッダが説くように、喪失は苦しみを生むので、喪失それ自体を恐れず、受け入れることが大切である。そうすれば何も失うことがなくなり、お互いの存在もかりそめのものとして、重要視せずに済むようになる。
- ② ブッダが説くように、人生が苦しみに満ちるのは、変わりゆくもの、消えゆくものに、いつまでも変わらないでくれ、消えないでくれとしがみつくと原因なので、そのことを理解し、執着を止めれば、喪失を乗り越えていける。
- ③ 孔子が示すように、たとえ挫折しても、家族的な絆を大切にすれば乗り越えることができる。挫折の克服のために重要なことは、子が親に孝行するように、上下関係をわかまえることであり、弟子であるならば師のために尽くすことである。
- ④ 孔子が示すように、挫折を克服するためには学問に励み、教育に力を注ぐことが大切である。学問によって立身出世することで地位を高め、自分に従う多くの弟子を持つことで、セーフティネットを築くことができるからである。

3 次の文章を読み、下の問いに答えよ。

京都五山の送り火は盂蘭盆に迎えた(a)先祖の霊を無事に送る道標であり、「大」の文字から順に、南無妙法蓮華經の題目である「妙」、「法」の文字、船や鳥居をかたどった火が次々に灯される。仏教の行事になぜ鳥居がと不思議に思われるが、祭りの火は、古来、神の送迎の手段として重要な意味をもっていたから、送り火自体が神仏の融合といえる。ここでは異なる宗教の交渉と関係をたどりながら日本の宗教について考えてみよう。

古代以来、神仏関係は日本の宗教史において大きな位置を占めている。仏教伝来以前にも土着の神の信仰はあったはずであるが、すでに大陸伝来の文化として仏教の影響があった7世紀後半から8世紀にかけて形成された記紀神話をもって仏教以前の信仰と考えるのは不適當である。

日本仏教の基礎が確立されたのは、奈良時代末の教学の隆盛を受け、(b)最澄や(c)空海の新しい思想が形成された平安初期であろう。この頃、(d)神仏習合と呼ばれる仏教と日本固有の神の信仰とが密接に関係し、時には一体化するような形態がみられるようになった。

中世になると、仏教と交渉しつつ、古代の日本固有の神の信仰は次第にその独自性を自覚するようになり、理論的に神道として形成されることになる。この中世においては、古代以来の大寺院が莊園を有し、巨大な経済力の下に政治的な影響力も大きかったが、それに対して、いわゆる(e)鎌倉新仏教が社会的に大きな力をもってくるのは室町時代にまで下る。

近世に入ると先ずキリスト教が日本の宗教に大きな影響を与えた。デウスの権威の下に、異なる秩序を提示するキリシタンは当時の為政者に危険なものと映ったのでやがて弾圧、禁教された。続いて17世紀には儒教が武士を中心に大きな影響を与え、神仏儒三教の相互関係を中心とする時代へと転換する。儒教は、しばしば神道と結びつき、宗教性を強め多様な発展を遂げることになるが、なかでも山崎闇斎の(g)垂加神道が大きな影響を与えた。近世の儒教的思想がすべて宗教に入るかという、(f)心学のように宗教と倫理の中間に位置するものもある。さらに国学から(h)復古神道の流れを通して、日本固有の「道」を求める運動が大きく展開する。記紀から「漢意」あるいは「仏意」を取り去ることができるかどうかは疑問であるが、本居宣長は仏教以前の純粋な日本のあり方を『古事記』に見出すことが可能と考えた。

近代は、ヨーロッパ文明が流れ込み、キリスト教が大きな影響を与えるようになり、仏教・キリスト教・神道の三教交渉の時代といえる。近代国家の体裁を整え、列強の一角に食い込んだ動向の中、知識人の目は外の政治から心の内面のあり方を問うようになった。その先駆けをなしたのが(i)内村鑑三などキリスト教系の思想家たちであった。キリスト教は、教育事業に力を入れるとともに、明治後期に社会主義の思想家たちをも生み出した。(j)幸徳秋水を除けば、安部磯雄、片山潜などはキリスト教徒であった。一方、神仏分離から神道は「万世一系」の天皇を中心とする「国家神道」として宗教の枠の外に立つことによって、様々な宗教はその活動を制約されることになった。その中で、キリスト教、仏教、教派神道など、それぞれが心の問題の解決や社会問題への対応など、宗教としての活動を展開した。しかし、最終的に天皇制国家による戦争体制に巻き込まれることになった。

盆を迎えて亡き人に思いを馳せ、厳かな気持ちになる日本人は、死後について、多くの人が極楽でも黄泉でもなく、天国に往くと考えている。そのような多様な形態を容れうるものとして、日本の宗教の交渉と関係を考える必要があるだろう。

問1 下線部(a)先祖の霊に関して考察を深めた人物の著作の抜粋を以下に挙げた。その人物として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

私がこの本の中で力を入れて説きたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、おそらくは世の始めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。

- ① 折口信夫 ② 南方熊楠 ③ 和辻哲郎 ④ 柳田国男

問2 下線部(b)最澄の説明に関して、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 従来の奈良仏教が定めた戒律によらず、『即身成仏義』を著して、天台宗独自の僧侶養成制度を確立した。
② 奈良仏教を超える思想の構築を目指して、唐の天台山で『華嚴經』にもとづく天台宗を研究した。
③ すべてのものは仏になる可能性があるとする「一切衆生悉有仏性」の教えを信じ、法華一乗の思想を唱えた。
④ 現世を穢れた世界と見て、来世に希望を託し、死後に阿弥陀仏の極楽に生まれるという極楽往生の教えを説いた。

問3 下線部(c)空海は留学前に『三教指帰』を著した。三教とは仏教・儒教・道教である。三人の人物の対話の形でそれらの優劣が論じられ、仏教の優位が説かれる。以下の文はそれぞれの人物が自分の立場を説明したものであるが、空欄の(あ)～(う)に当てはまる宗教の組合せとして最も適当なものを下の①～⑥のうちから一つ選べ。

いかにも(あ)の学者らしい威風堂々たる亀毛先生は、雄弁に仁義の学問の重要性、出世の道を説く。ついで、ぼろをまとい髪をのばした虚妄隠士が(い)を語って、不老不死を説き神仙の妖術を聞かせる。最後に、髪を剃りやせ細った仮名乞児が登場し、生命あるものへの慈悲を説いて(う)への帰依をすすめる。

- ① あ 道教 い 儒教 う 仏教
② あ 道教 い 仏教 う 儒教
③ あ 儒教 い 道教 う 仏教
④ あ 儒教 い 仏教 う 道教
⑤ あ 仏教 い 道教 う 儒教
⑥ あ 仏教 い 儒教 う 道教

問4 下線部(d) 神仏習合に関する記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 神は、本来、仏や菩薩であったものが、人々を救うために姿をかえて仮にこの世にあらわれた姿であるとする考え方を本地垂迹説という。
- ② 仏滅後、神が現れても、正法・像法・末法の三つの時代区分を経て、悟り・修行・仏の教えがそれぞれ消滅する。
- ③ 多くの神社に寺がおかれ、神前に読経が奉納され、神は仏教の供養によって輪廻する苦しみから救われる。一方で、寺には鎮守の神が祀られた。
- ④ 本来、神の領域とみなされていた山において、山伏は仏教の修行をし、<sup>げんりき</sup>験力を修めようとするのが修験道である。

問5 下線部(e) 鎌倉新仏教の記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 法然は、ただ阿弥陀仏の力にすがって、ひたすら「南無阿弥陀仏」を唱えることによって、極楽浄土に往生することができると説いた。
- ② 親鸞は、自分は罪深い悪人だと自覚し、仏にすがろうとする気持ちを持つこと自体、仏の広大な慈悲の力によるものだとして、その信仰を絶対自力の信仰として強調した。
- ③ 道元は、仏性の自覚としての悟りは、ひたすら念仏にうちこみ、身も心もいっさいの執着から解き放たれて自在の境地にいたることによって達せられるとした。
- ④ 日蓮は、蒙古襲来の原因を『法華経』を信じない仏者のあり方にあるとし、「念仏無間」、すなわち念仏は無間地獄におちるといい、禅宗、天台宗、律宗にも激しい批判を加えた。

問6 下線部(f) 心学という神道・儒教・仏教、さらには老荘の教えも取り入れた、独自の倫理を唱えた江戸時代の思想家は誰かを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 富永仲基      ② 本居宣長      ③ 安藤昌益      ④ 石田梅岩

問7 下線部(g) 垂加神道の説明として、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 密教による神道説で、伊勢の内宮・外宮の両部の神である天照大神と豊受大神を、それぞれ胎蔵界の大日如来、金剛界の大日如来の垂迹とみなした。
- ② 神仏習合を排し、神道を朱子学により理論化した儒家神道の集大成である。神道の核心は皇統の護持にあるとした。神は人の祈祷や正直<sup>くにとこたち</sup>に対して恵みを与えるとした。
- ③ 伊勢の外宮の豊受大神を天照大神の先代である国常立尊に比定して中心とする。正直を強調し、神国意識と並んで仏教排除の立場が打ち出されている。
- ④ 神道を根本とし、儒教・仏教を神道の枝葉花実として位置づけた。また神社本所として全国の神社・神職を支配下においた。

問8 下線部(h) 復古神道を唱えた人物は誰か、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 平田篤胤      ② 度会家行      ③ 吉田兼俱      ④ 吉川惟足

問9 下線部(i) 内村鑑三はキリスト教が、武士の儒教倫理(武士道)につながるものと考えた。その内村鑑三の考えとして、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 東京に一番町教会(のちの富士見町教会)を創立し、終生その牧師をつとめ、福音主義信仰の確立を図った。儒学や仏法のなかにもキリスト教につながる因子があると指摘し、「洗礼を受けたる武士道」としてのキリスト教を説いた。
- ② 武士道は、過去も現在も日本を生かす精神であり、それはキリスト教を受け入れる素地となると考え、日本に必要なのは、武士道を養い、育てるキリスト教であると説き、英文で『武士道』を著し、欧米に日本文化を紹介した。
- ③ 国家を存立させるのは英雄の力ではなく、藩士の家に生まれ、武士道を体得し、教育と知識をもった者の力であると説き、官憲や世人の迫害に屈せず、キリスト教精神に基づく自由自治の教育を京都で行った。門下からは徳富蘇峰・安部磯雄らが出た。
- ④ 社会正義を貫き、利害や打算をこえた清廉潔白な武士道の精神こそが、キリスト教の真理と正義を実現するための土台となるという信念をあらわした。世界は「武士道の上に接木されたる基督教に由て救われる」ものと説いた。

問10 下線部(j) 幸徳秋水のことばとして最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 「ふつう民権とよばれているものにも、2種類あります。イギリスやフランスの民権は回復の民権です。下からすすんで取ったものです。ところがまた、別に恩賜の民権とでも言うべきものがあります」
- ② 「民本主義という文字は、日本語としてはきわめて新しい用例である。従来は民主主義という語をもって普通に唱えられておったようだ。時としてはまた民衆主義とか、平民主義と呼ばれたこともある」
- ③ 「帝国主義は、愛国心を<sup>たていと</sup>経とし、いわゆる軍国主義を<sup>よこいと</sup>緯として、織りあげた政策ではないか。すくなくとも、愛国心と軍国主義とは、列国現在の帝国主義に共有する条件ではないか」
- ④ 「西洋の開化は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である。ここに内発的というのは内から自然に出て発展するという意味で、(中略)また外発的とは、外からおっかぶさった他の力でやむを得ず一種の形式をとるのを指したつもりなのです」

4 次の文章を読み、下の問いに答えよ。

現代に生きる私たちは様々な形で科学の恩恵を受けている。同時に科学は私たちの判断根拠を形作るものでもあり、私たちはある知識に対して、「科学的な知識かどうか」という判断をしばしば下す。例えば「地球は太陽の周りを回っている」という知識は科学的な知識であるが、「A 型の人間は几帳面である」という知識は、占いや迷信に過ぎず、科学に属するものではないというようにである。では私たちはどのような基準によって「科学的な知識」と「科学的でない知識」の線引きを行っているのか、考えてみよう。

「科学的な知識」とは「客観的に正しい知識」であるという基準が、一つの答えとしてあげられるだろう。「地球は太陽の周りを回っている」という知識は、その方法さえ得られれば誰にでも確認できることであり、「客観的に正しい知識」であるように見えるため、「科学的な知識」と言うことができる。このような基準を提唱した人物としてはイギリス経験論に属する思想家ベーコンがあげられる。ベーコンは(a) 先入観を排除した観察によって得られる知識を比較検討することで科学的な知識は獲得されるとする(b) 帰納法を確立したのである。この帰納法は後に、(c) ヒュームによって批判されることになる。

しかし、このような基準によって「地球は太陽の周りを回っている」という知識と、「A 型の人間は几帳面である」という知識の間に線を引き出すことは困難だろう。「A 型の人間は几帳面である」という知識は、見方によっては帰納的に証明できるからである。しかし(d) 占いや迷信を物理学や化学と同様の科学として扱うべきではないだろう。これらはどのように区別できるのだろうか。

その区別は「言語」の指す意味内容によって区別されると考える思想家もいる。すなわち、(e) 科学において用いられる言語は経験によって確認可能な明確な対象を持たなければならないと考える人々である。その考えに従うならば「几帳面である」という言語がどのような状態を指すのか不明確である以上、「A 型の人間は几帳面である」という知識は科学に属さないとと言える。そのみならず(f) 「何が善であるか」という事を問う倫理学もまた確実な学ではないとして否定されるのである。さらに(g) ポパーは、ある知識が「科学的かどうか」の基準は、その知識が「正しいと証明できるか」ではなく、「誤っていると証明できるかどうか」という点にあると主張し、「誤っていると証明できる知識」は反証可能性を持つとされ、そのような知識は「科学的な知識」とされるとされる。ポパーはこの反証可能性という基準を持ち込むことによって、当時科学的であると主張されていた(h) マルクスの哲学は反証不可能なものであり、科学ではないと否定したのである。

これに対し、そもそも科学とは「客観的に正しい知識」を求める営みではないとする見方も存在している。アメリカの哲学者パースによれば、人間が到達することができるのは「その時点で最も間違いの少ないと考えられる知識」に過ぎない。つまり「地球は太陽の周りを回っている」ということも、そのような知識に過ぎないとみなされるのである。このようなパースの思想はプラグマティズムとしてジェームズに受け継がれる。ジェームズは「A 型の人間は几帳面である」というような(i) 迷信に属する知識も、場合によっては正しいものになりうると主張したことで知られている。この立場に立つならば、「科学的な知識」と「科学的でない知識」を「正しさ」という点で区別するのは困難と言えるだろう。

以上のように私たちが常識として行っている「科学的な知識」と「科学的でない知識」の線引きについて、その基準を明確にするのは極めて困難である。しかし、現代の社会には「非科学的」でありながら「科学的」を装う多くのものが存在しており、それらを見極めるためには、やはり科学と向き合い続けなければならない。同時にその(j) 「科学」が本当に人間の生活を幸福にするものなのかどうか、立ち止まって考察することもまた、現代においては重要と言えるのではないだろうか。

問 1 下線部(a)の先入観のことをベーコンは「イドラ」と呼んでおり、イドラは四種に分類できると述べている。この四種のイドラについてそれぞれ説明したものとして最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 種族のイドラとは、人間という種族は自らの経験を信じてしまう傾向があるように、個人の経験によって誤った判断をしてしまうイドラのことである。
- ② 洞窟のイドラとは、洞窟の中にいる人間は光が遮られ、対象の全てを見ることができないように、物事を部分的にのみ見ることで生じるイドラのことである。
- ③ 市場のイドラとは、市場の取引においては欲望に囚われ、誤った判断をしてしまうように、自らの経済的な欲望に基づくイドラのことである。
- ④ 劇場のイドラとは、劇場で演じられている演劇を本物であると思い込んでしまうように、権威ある人物が語ることを信じ込んでしまうイドラのことである。

問 2 下線部(b)に述べられている帰納法とは異なる演繹法を提唱した人物としてデカルトがあげられる。このデカルトについて述べたものとして最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① デカルトは、方法的懐疑によってあらゆるものを疑った結果、自らが認識していないものは確実に存在しているということではできなと考へ、「存在するとは知覚されていることである」と述べた。
- ② デカルトは、明晰判明な真理として、この世界に存在するあらゆる事物を構成しているモノイドという実体が存在するということを見出し、その実体が予定調和的に運動することで世界が成り立っていると述べた。
- ③ デカルトは、精神の属性を思惟、身体の属性を延長とする立場に立ちながらも、両者は究極的には無限な存在である神の様態であり、永遠の相の下では同一の実体として認識されると主張した。
- ④ デカルトは、人間の感情や欲望は、身体に対する外界からの働きを精神が受け取ることによって生じるものであると考へ、その感情や欲望を抑える所に人間精神の高邁さがあると考へた。

問 3 下線部(c)にあるヒュームによって、カントは「独断のまどろみを覚まされた」と述べているが、カントの認識論について説明したものとして、最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① カントは、経験論の影響のもとで、理性の能力を徹底的に批判した批判哲学を展開し、人間の理性は独断的で信用できないものであり、経験のみが全ての認識を形作るものであると考へた。
- ② カントは、人間は自らの先天的な認識能力に従って、現象として立ち現れる対象を構成していると考え、客観的に存在する対象を捉えるのが認識であるという従来の認識論を転換した。
- ③ カントは、経験によって現象の世界を認識し、理性によって物自体を認識すると考へ、経験と理性はそれぞれ異なる領域を認識の対象としているとして、経験論と合理論を調停した。
- ④ カントは、対象を認識する理論理性の力を無制限に認め、人間が理論理性の導きに従い、純粋に理性的に認識するのであれば、客観的な真理を認識することも可能であると主張した。



問4 下線部(d)に述べられているような、科学と迷信の区別を重視する立場の一つに啓蒙主義がある。この啓蒙主義の思想家たちについて説明したものとして、最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① ロックは、感情は物質の働きによって生じていると科学的に結論付け、人間とは己の欲望を満たすことのみを目的とする利己的な存在であると考えた。
- ② ルソーは、科学と自然を峻別した上で、自然の中で生きることが人間本来のあり方であると考え、人間は動物のように生活すべきであると説いた。
- ③ ヴォルテールは、自然科学の知識を尊重する一方で、イギリスの自由主義を紹介してアンシャンレジームを批判し、フランス革命に影響を与えた。
- ④ デイドロは、法や政治のあり方を科学的に分析した結果、三権分立が権力のあり方として望ましいと考え、『法の精神』を著した。

問5 下線部(e)のような立場に立った思想家の一人で、後に「日常生活における言語の意味は、ルールを共有するもの同士の暗黙の了解によって決まっている」とする言語ゲームという概念を提唱した人物として、最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① ウィトゲンシュタイン    ② レヴィナス    ③ ソシュール    ④ クワイン

問6 下線部(f)にあるように倫理学においては「何が善であるか」ということをつねに問題にしてきたが、その問いに答えようとする一つの立場として、功利主義が存在する。功利主義の思想家ミルについて述べたものとして、最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① ミルは、幸福には質の差があると考え、質や持続性、強度などの基準で幸福の総量を計算し、その総量が最大になる社会こそが理想の社会であると主張した。
- ② ミルは、全ての人間には他人を幸福にしたいと思う利他心がそなわっていると考え、キリスト教の隣人愛こそが功利主義の道徳の基本であると主張した。
- ③ ミルは、誰もが平等に幸福になれる社会を実現すべきであると考え、そのためには無知のヴェールの下で公正な社会について考察しなければならないと主張した。
- ④ ミルは、人間は内的制裁である良心の命令に、無条件的に従うことが重要と考え、それによってのみ善い行為、幸福にいたる行為が可能になると主張した。

問7 下線部(g)のポパーと論争した人物としてクーンがあげられるが、クーンの思想について述べたものとして最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 科学をはじめとする理性に基づく諸学を、ロゴス中心主義として批判し、新しい学を模索するためには脱構築が必要であると述べた。
- ② 従来の科学は人間が意識できる領域のみを対象にしている事を批判し、無意識に存在するイドを探求することが人間を知るためには不可欠であると主張した。
- ③ 科学理論といえどもパラダイムに過ぎないため、その正しさは普遍的なものとは言えず、時代ごとに変化していくものであると述べた。
- ④ 科学的思考もまた西洋という特定の文化の中で生まれた産物に過ぎず、迷信を信ずる文化にも、その文化なりの野生の思考が存在すると主張した。

問8 下線部(h)のマルクスの思想について説明したものとして、最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 労働者が疎外されている状況を改善するためには、生産手段を私有する資本家の協力が必要であると考え、資本家の良心に訴えることが重要であると主張した。
- ② 資本主義社会を全面的に否定すべきではないと考え、弁証法的に優れた部分を残しながら、議会政治を通じて福祉国家を実現していくべきであると主張した。
- ③ 哲学や道徳などの上部構造は、下部構造である自由を目指す精神によって動かされていると考え、人間の歴史はその精神の自己展開であると主張した。
- ④ 資本家による生産手段の独占が労働者の搾取を生んでいると考え、社会革命によって生産手段が社会の共有物となることによって状況は改善されると主張した。

問9 下線部(i)にあるようにジェームズは迷信に属する知識であっても、場合によっては正しいと考えるべきだと主張したが、ジェームズにおける「知識の正しさの基準」とは何か、その説明として最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 人間にとって本当に大切なことは理性によっては理解できず、繊細な精神によって捉えるならば、迷信も正しい知識と考えられると主張した。
- ② 重要なのは客観的な真理ではないと考え、その知識が「私」にとっての真理、つまり主体的真理であるならば、迷信も正しい知識と考えられると主張した。
- ③ その知識を知った人間が心の安定を得られるのであれば、その人間にとっては正しいものであると考え、迷信も正しい知識と考えられると主張した。
- ④ 人間の知識の発展段階を社会の発展に即して三段階に分け、初期の段階にある社会においては、迷信も正しい知識と考えられると主張した。

問10 下線部(j)にあるような疑念を提示した人々としてアドルノ、ホルクハイマーがあげられるが、彼らの思想について述べたものとして、最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 科学を基礎付ける理性が、生活を豊かにするための道具としてのみ用いられてきたことを指摘し、科学の目的についても十分吟味すべきであると主張した。
- ② 科学の持つ合理性が、コミュニケーションを中心とすべき共同体の人間関係を侵食することにより、生活世界の植民地化が起こっていると主張した。
- ③ 科学的な知識を自明のものとして無批判に受け入れることを批判し、批判的精神を失った一元的人間となるべきではないと主張した。
- ④ 科学の正しさは社会における権力関係によって決定され、科学はその価値に適応できない人間を狂気として排除する装置として働いていると主張した。

5 以下は、自分たちの将来について語り合う高校生AとBの会話である。この文章を読み、下の問い(問1～10)に答えよ。

- A：いよいよ受験も迫ってきたけど、勉強の方はどう。志望校は決まった。  
 B：志望校どころか、学部が決まらなくて困っているよ。理系のクラスに居るのだけど、文系の学問にも興味が出てきて、(a)自分が本当は何がしたいのか、わからなくなってね。  
 A：ずいぶん前から(b)自然や科学に興味・関心があるって言っていたのに、不思議なものね。  
 B：最近、そもそも(c)科学って何だろうか、などと考えることが多くて。  
 A：言われてみれば、科学とは何かというのも難しい問題だよ。 (d)自分のことは自分が一番知らないかもね。科学者自身も科学とは何かわからず研究に専念しているのかもね。  
 B：でも(e)最近の科学者にまつわる報道などに触れると、科学者を目指す人間にもそれなりの自覚が必要だと感じるのだけど。  
 A：核の問題や(f)環境問題なども、そもそも科学者が発見した理論や開発した技術が発端ともいえるかもしれない。もちろんそのことを自覚しているかどうかは別だけど。  
 B：(g)科学者にとつての責任のあり方というのも難しい問題だよ。何から何まで科学者に責任を押し付けるわけにもいかないし、かといってどこに責任があるのかも分からないし。  
 A：最先端の科学研究の現場では、倫理的な問題が話題になるわね。それまで予想もつかなかった状況が生まれている(h)生命工学や医療の分野などでは、特に科学者だけに任せているわけにはいかないような気がする。  
 B：科学に限らず、(i)責任というものは、専門家に任せるのではなく一人ひとりが自覚しなければならぬことかもしれないね。  
 A：なんだか話が大きくなってきたけど、大学でも勉強してみたい問題だよ。

問1 下線部(a)に関連して、青年期においては自我同一性(アイデンティティ)の確立が最も重要な発達課題だとされる。アイデンティティに関する次の具体例ア～ウと、それぞれの例にあてはまる記述の組合せとして正しいものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。

- ア 今の自分は本当の自分ではないという感じが離れないので、何度転職してもこれと言った仕事には巡りあえないが、自分には隠された能力が眠っていると考えてしまう。  
 イ 高校生である私は子ども扱いをされて腹が立つことがあるが、かといって大人としての自信があるわけでもなく、自分がどちらなのか分からず不安定になることがある。  
 ウ 自分のやりたいことがなかなか見つからず、大学の学部を変更したりしたが、やっと自分のしたいことが見つかりその方面の仕事に就いて毎日が充実している。

- A レヴィンが唱えた、マージナルマンの状況  
 B エリクソンが説明した、自我同一性の確立  
 C 小此木啓吾が指摘した、モラトリアム人間の特徴

- ① アーA イーB ウーC  
 ② アーA イーC ウーB  
 ③ アーB イーA ウーC  
 ④ アーB イーC ウーA  
 ⑤ アーC イーA ウーB  
 ⑥ アーC イーB ウーA

問2 下線部(b)に関連して、次の表は、4カ国の高校1～3年生にアンケート形式で調査した結果である。表から読み取れることとして最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

表：自然や科学への興味・関心

	とてもある	ある	あまりない	ない	無回答
日本	13.3	46.2	25.4	6.0	9.0
米国	14.4	49.2	28.7	7.3	0.5
中国	20.9	58.4	13.9	2.6	4.1
韓国	14.9	48.2	28.3	8.4	0.2

(国立青少年教育振興機構 2013年調査・2014年8月18日朝日新聞夕刊)

- ① 自然や科学への興味・関心が「とてもある」と答えた高校生の割合が最も高いのは中国であるが、興味・関心が「ない」と答えた高校生の割合が低いのは韓国である。  
 ② 中国の高校生は、自然や科学への興味・関心が「とてもある」と答えた割合においても、「ある」と答えた割合でも4カ国の中で最上位であるが、逆に「ない」と答えた割合も4カ国で最も大きい。  
 ③ 自然や科学への興味・関心が「とてもある」と答えた割合は、中国の高校生が米国の高校生より高いが、「ある」と答えた割合をそれに加えると逆転して米国の高校生の方が高くなる。  
 ④ 日本の高校生は、自然や科学への興味・関心が「ない」と答えた割合は高くないが、「無回答」の割合をそれに加えると4カ国で最も高い割合となる。

問3 下線部(c)に関連して、科学革命にかかわった科学者を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① ポーランドの天文学者であるコペルニクスは、ぼうだいな観測データを分析することで、天体は理想的な円運動をしているというそれまでの呪縛から逃れ、惑星の軌道が太陽をその焦点の一つとする楕円であることを突き止めた。  
 ② イタリアの物理学者ガリレイは、慣性の法則や落体の法則の発見で知られるが、「自然は数学の文字で書かれている」という、数学的な自然観をその信念として、自然の底にある法則性を追求した。  
 ③ 万有引力の法則の発見者ニュートンは、すべての物質の間に働く引力は、いわば生命力のようなものだとして、宇宙全体を一つの生命体だと考える目的論的自然観を体系的に確立した。  
 ④ キリスト教世界を支配していた天動説に反対し地動説を唱えたケプラーは、太陽こそ神の座であり人間世界の周りを神が回るのではなく、人間が神の周りを回るはずだというのが、太陽が中心である理由の一つだと主張した。

問4 下線部(d)に関連して、パーソナリティについて説明したものととして**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① シュプラランガーは、人生において何に価値を置くかによって、それぞれの人の個性が現れるとして、6つの類型を提示した。
- ② フロムは、人間はその成長環境によって、伝統指向型と内部指向型、他人指向型の3つに分化すると主張した。
- ③ クレッチマーは、人間の体型と気質には相関があるとし、やせ型と肥満型、筋骨型の3つに分類した。
- ④ ユングは、人間の心のエネルギーが向かう方向によって、内向型と外向型という2つの類型があるとした。

問5 下線部(e)に関連して、マスコミや情報技術の分野において現在必要とされているものとして、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① メディア=リテラシー      ② ステレオタイプ
- ③ センセーションナリズム      ④ デジタル=デバイド

問6 下線部(f)に関して、次の文章は、環境問題に対する取り組みについて述べたものである。文章中の(あ)～(う)に入れる語句の組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。

1992年にリオデジャネイロで開催された(あ)は、多くの文書が合意され、大きな成果をもたらした。例えば、その後国際的公正さが設定された名古屋議定書の締結に結び付いた(い)などがその一例であろう。ただし、その後は、(う)が深刻化したため、2012年「リオ+20」と銘打って開催された国連持続可能な開発会議は具体的な成果の乏しいものとなった。

- |              |             |          |
|--------------|-------------|----------|
| ① あ 国連人間環境会議 | い 気候変動枠組み条約 | う 越境汚染問題 |
| ② あ 国連人間環境会議 | い 気候変動枠組み条約 | う 環境南北問題 |
| ③ あ 国連人間環境会議 | い 生物多様性条約   | う 越境汚染問題 |
| ④ あ 国連人間環境会議 | い 生物多様性条約   | う 環境南北問題 |
| ⑤ あ 国連環境開発会議 | い 気候変動枠組み条約 | う 越境汚染問題 |
| ⑥ あ 国連環境開発会議 | い 気候変動枠組み条約 | う 環境南北問題 |
| ⑦ あ 国連環境開発会議 | い 生物多様性条約   | う 越境汚染問題 |
| ⑧ あ 国連環境開発会議 | い 生物多様性条約   | う 環境南北問題 |

問7 下線部(g)に関連して、次の文章は日本の理論物理学者である朝永振一郎が、第1回パグウォッシュ会議について解説した文章の一部である。その内容を説明したものととして最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

発見の多くは直ちに新技術の開発となり、その社会的影響は善悪いずれにせよ直ちにあらわれる。科学者はその目で影響を見うるし、しようと思えば、それを善の方に、また悪の方に向けることもできる。一步ゆずって、善悪どちらの方に向けるかという決定は科学者以外の人がするとして、どういう使い方をすれば善になり、どういう使い方をすれば悪になるか、また、善用がどれだけ好ましいものであり、悪用がどれだけ破壊的なものであるかの正しい評価は科学者が科学上のデータに立って始めて行い得ることである。したがって、少なくともここまでの作業の責任は、科学者が負わなければ誰も負うことのできないものである。  
(朝永振一郎『科学者の社会的責任』みすず書房、1982年、154頁)

- ① 科学の技術的応用の是非については政策的判断を経ることが必要であり、科学的発見が実際に新しい技術として実用化されるには、合意の形成のために通常相当の時間と労力が必要とされる。
- ② 科学者自身が新技術の開発によって科学上の発見を悪用しないとしても、それらの新技術が開発されればどのような応用が可能であり、それがもたらす社会的影響を見極めることは科学者の責務である。
- ③ 科学の発見を善用するか悪用するかを決定することが科学者の責任でない理由は、科学上の新発見が応用されることでどのような帰結をもたらすかが科学者の予想を超えていることにある。
- ④ 科学は善悪のどちらにも向けることが可能であるが、その決定に科学者が関与することは不可能であり、社会的要請に応じて、決定権を持っている人々に科学上のデータを提供することが科学者に残された使命である。

問8 下線部(h)に関連して、次のア～ウは、それぞれ日本における生命工学・生殖医療などについての規制についての記述である。その正誤の組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。

- ア イギリスでクローン羊が生まれてから、クローン技術は進歩し続けているが、クローン技術を人間に応用しクローン人間を生み出すことは、日本では法律によって禁止されている。
- イ 依頼者自身の卵子・精子であるか否かにかかわらず、日本において代理出産が許されるのは、依頼者の血縁の母・姉妹に限定されており、第三者によるものや、金銭の授受がともなうものは法律によって禁止されている。
- ウ 体細胞から作られる万能細胞であるiPS細胞(人工多能性幹細胞)の作成が可能となったので、人間の受精卵から生み出され倫理的問題があるES細胞(胚性幹細胞)の作成は法律によって禁止されている。

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| ① ア 正    イ 正    ウ 正 | ② ア 正    イ 正    ウ 誤 |
| ③ ア 正    イ 誤    ウ 正 | ④ ア 正    イ 誤    ウ 誤 |
| ⑤ ア 誤    イ 正    ウ 正 | ⑥ ア 誤    イ 正    ウ 誤 |
| ⑦ ア 誤    イ 誤    ウ 正 | ⑧ ア 誤    イ 誤    ウ 誤 |

問9 下線部(i)に関連して、責任について述べた次の文章のうち、**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① フランスの思想家サルトルは、「実存主義はヒューマニズムである」という講演のなかで、「人間は自由の刑に処せられている」として、人間は自らの自由を引き受け、その選択に自ら責任を負わなければならない、そこから逃げ出すことはできないとした。
- ② ドイツ敗戦 40 周年記念式典において、当時西ドイツのヴァイツゼッカー大統領は、ナチス時代にドイツ人の犯した罪をふり返り「過去に目をとざすものは、けっきょく現在にも目をひらかなくなる」という「荒地の 40 年」という演説を行った。
- ③ ノーベル平和賞を受賞したシュヴァイツァーは、アフリカで医療にたずさわるなか、人間は生きようとする生命に囲まれており、その生命への畏敬こそ道徳の源であり、「倫理とはすべての生きとし生けるものへの、無限に拡大された責任である」と説いた。
- ④ イギリスの哲学者ラッセルは、ドイツ生まれの物理学者アインシュタインとともに、「ラッセル・アインシュタイン宣言」のなかで、環境破壊をもたらした科学者の責任を問い、人類絶滅の危機を救うために、世界の科学者が力を結集することを呼びかけた。

問10 本文の内容に合致する記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① Bは進路に悩むなかで科学とは何かと考えるようになっていたが、Aと話をするうちに科学に対する問題意識や責任は単に科学者だけに任せていないで多くの人が責任を感じるべきだと考えるようになった。
- ② Aは科学者は純粋な知的好奇心からその研究に邁進するものだと思っていたが、Bと話をするうちに科学にまつわる倫理的な問題については、科学者に対して指導や助言をする機関が必要な時代になっていると思うようになった。
- ③ Bはもともと核や環境についての問題に興味を持っていたが、Aと話をするうちに生命工学や医療についても様々な課題があることに気づき、そのような研究をしている大学を探そうと思うようになった。
- ④ Aは科学とは何かということは科学者の現場では問題としてはならないと考えていたが、Bと話をするうちに科学とは何かは科学者にとっても大きな問題だと考えるようになった。